

元中央大学職員の

世界放浪

5

石井誠啓

Ishii Masayoshi



旅の魅力

「何か危険な目にあわなかった？」

旅先でも帰国後もよく聞かれる。

そしてお決まりのように睡眠薬強盗にあった体験談を語る僕。悔しくなっていくえばウソになるけど、今ではひとつのネタになっている。世界一周して無事に帰ってきたんだから、今じゃ過去の笑い話。それにもっとひどい目にあつた人たちの中にはいたし。

長旅をしてれば、そりゃあ嫌なこと、危険なこともある。それでもそれ以上に旅には大きな魅力があると言いきれる。つらかったことの何倍

も旅に出てよかつたと思えることが起こるから。旅ならではの出会いが次から次へ訪れるから。同感でしょ、旅人のみなさん？

ブルガリアで睡眠薬強盗に！

やられた……。悔しいーっ！！

いままで人の話では聞いてたけど、まさか自分の身に起こるなんて夢にも思わなかつた。経験上、良い人悪い人の区別はできると思ってたのに、まだまだ甘かつた。目が覚めたら病院のベッドの上。日本大使館の人が迎えに来てくれたところだった。頭がぼーっとする。あれ？ 荷物がな

い。そうか、自分は睡眠薬を飲まされたのかと気づく。ブルガリアの首都ソフィアからリ

ラの僧院に行くため、早朝トラム乗り場で1人うろろろしていたら、自称ギリシヤ人を名乗る男がつたない英語で話しかけてきた。妹が日本の大使館で働いていて、彼自身も日本に行つたことがあるという。彼もリラの途中まで行くというので一緒に行くことになった。

トラムを降り、乗り換えたバスは満員だった。席につくやいなや彼がクッキーをすすめてくる。朝食をとつていなかった僕はお腹が減つたので1つもらつた。クッキーは箱の中に入っていたが、封は開けられていた。一番隅のを1つとる。彼がその横のをとる。完全には信用していなかつたので、彼が食べたのを見ながら僕も安心して食べた。

ふーん、変わった味だなあ、まあブルガリアのクッキーはこういう味なんだろう、きつと。ああ、戻れるものなら戻って吐き出したいその瞬間……。

食べてすぐ眠つたらしい。食べた後の記憶がない。財布の中の現金含め、大きなバックパック、小さなリュックサック、すべて盗られた。パスポート、クレジットカード、トラベラーズチェックなどすべてだ。財布の中に残されていたシティバンクのカード、それに日記と撮り終わつたフィルムを前日に日本に送つていたのが不幸中の幸いだった。

副作用のせいなのか翌日になつても頭は痛かつたが、彼と出会つたトラム乗り場に戻つてみた。昔から刑事もものドラマはいうからね、「犯人は現場に戻る」と。が、犯人は現れない。現実とは違ふのね。今考えればそんなフラフラな状態で何ができたんだつて感じだけど、そのときは犯人を捕まえて荷物を取り戻す気でいたんだ。

最初は当然悔しかつた。不名誉なことに地元の新聞にも僕の事件が載つたらしい。情けない。それでも

根っからのポジティブ志向のおかけ
か、2、3日もするとまあ仕方ない
と気持ち切り替わっていた。「こ
んなことで負けてたまるか!!」と。

それに命まではとられなかったん
だし、よしとしくちゃ。あとで聞
いた話だが、睡眠薬を飲まされた後、
眠ったのか確認のためボコボコに
殴られた人。眠って倒れるときに歯
をどこかにぶつけ、起きたら歯がな
かった人。もつともひどい話では起
きたら腎臓がなかった人（おそらく
臓器売買だろう）。それらに比べた
ら僕なんてマシ。体のどこも失って
ないし、痛い思いもしていない。物
はまた買える。それに旅を続けると
いう「意志」までは盗られなかった。

事件数日後、日本大使館に僕の
パスポート、クレジットカード、ス
キューバダイビングのライセンスが
郵送で届けられた。犯人からとしか
考えられない。でもなんで？ 大使
館の人そんなことは通常ありえな
いと驚いていた。犯人に聞きたい。
おまえはいい奴なのか？ 悪い奴
なのか？

しばらくは日本大使館や警察を
行ったり来たりした。コンピュー

ターにより犯人の似顔絵をつくった。
これもよく刑事ドラマにでてくるや
つだ。人間の記憶なんてあいまい。
どこまで覚えているかと思信はな
かったが協力した。郵送されてきた
封筒に犯人の指紋がついてるんじゃ
ないかと言ってみたが、どうやらブ
ルガリア警察には指紋を調べる機器
がないらしい。約1年後だろうか、
風の噂で犯人が捕まったことを聞い
た。

それまで多くの人に出会い、物を
もらうことに慣れ、油断していた。
出会う人すべてを信用するのは危な
い。中には悪事目的で近づいてくる
ものもある。だからといって、出会う
人をいちいち疑っていたらおもしろ
くない。何のために旅してるのかわ
からない。旅の醍醐味は「出会い」だ。
では自分の身に災難がふりかかっ
たとき、どうすべきか？ 僕の場
合それも運だったとあきらめる。起
こってしまったことは仕方ない。自
分の過去の何かしらの行いがそうい
う運を引き込んだんだろう。受け入
れるしかない。僕はそのあとでも多
くの人に出会い、できるだけ用心をし
ながらもいろんなものをもらった。

ただ、クッキーをもらうときだけは
どうしてもその事件を思い出す。出
会った旅行者がそれを知りながらわ
ざとクッキーをくれたりする。コノ
ヤロー!!

心穏やかな国ミャンマー

何か無性に懐かしい雰囲気、それ
がミャンマーに対する第一印象だっ
た。時間がゆったり流れている、そ
う感じずにはいられない国。

軍事政権というイメージが悪い
が、ミャンマーは治安がいい。これ
だけ安心して旅できる国も少ない。
犯罪は稀らしく、それは仏教の精神
と法律の厳しさによるのだとか。こ
の国は上座部仏教（小乗仏教）で、
人々は生まれ
たときから、
仏教と共に生
活し、カルマ
の原因と結果
を信じている。
悪い行為は
いずれ自分に
返ってくる
と信じてるから、
犯罪は少ない



木陰で遊ぶミャンマーの少年。人なつ
こい親近感=バガン

し、互いが互いに優しくなれる。
バゴタ（お寺）に真剣な表情でお
参りする人々は輝いている。お坊さ
んたちは毎日托鉢に出かけ、家一軒
一軒から食事の施しを受ける。人々
も喜んでお布施する。

経済的には決して豊かとはいえ
ないのにもかかわらず、喫茶店でお
茶しながら談笑する人々の表情は暗
くない。あまり酒を飲まないミャン
マー人は喫茶店でおしゃべりするの
が大好きなようだ。

物質的には豊かだけど、詐欺、殺人、
強盗、猥褻行為と数々の犯罪が目立
つ今日の日本。物質的にはぐっと劣
るミャンマーからの方が穏やかな空
気を感じたのは僕だけだろうか。



仏教3大遺跡のひとつバガン遺跡を見たあと、あまり観光客が行かない小さな町メッティーラを訪れた。第2次世界大戦時の激戦地という以外は特に見所がないところだが6日間滞在した。

到着してすぐ、屋台で揚げ物を頬張っていたら、英語ペラペラのミャンマー人おばあちゃんと知り会った。驚いたことに彼女はカトリック教徒。ミャンマーでクリスチャンに会うとは夢にも思わなかった。家に招かれ

立派なお坊さんになるため日夜精進する小僧さん達＝メッシーラ（ミャンマー）

てまたびつくり。孫娘のかわいいこと。彼女は大学のミスコンで1位になり、モデルもやっているという。おばあちゃんがしきりに自慢するのもわかる美人だった。写真を撮りたかったけど、シャイな性格らしくまったく話せなかったのが残念。

それからセゴン寺というお寺に行き、到着して5分も経たないうちに教壇に立たされた。最初は「えーっ!!」って驚いたけど3秒後には「ま、いっか」と承諾。ここではミャンマーの若者たちが英語や日本語を勉強している。首都ヤンゴンの日本語学校でもそうだが、多くのミャンマー人が日本人相手のガイド、日本企業への就職を目的に日本語を勉強している。いきなりの展開に少したじろいだけど、結局毎日、先生してた。教え方などわからない僕は、会話と発音を教えただけ。気楽にやっただけ、おもしろかった。生徒たちは勉強熱心で素直だった。以前にケニアのスラムの学校で少しだけ授業担当したときも思ったけど、

教えるって難しいけどおもしろい。メッティーラにいる間、昼飯は毎日セゴン寺でお坊さんが托鉢してきた食事を頂いていた。僕なんか食べていいの？とも思ったが、まあ他のミャンマー人の若者たちも食べていたからよしとしよう。夕飯もある家に招かれて、毎日そこでごちそうになっていた。ミャンマーの家庭の味はおいしい。屋台のものは油っこく、一般的にミャンマーの食は評判が悪い。でも、家庭料理は煮物中心で日本人の口にも合うと思った。滞在中、毎日病院に通った。インドを出る少し前に体調を崩し、そのときの抵抗力が落ちたのか、体にあつた傷口10箇所近くが一斉に膿みだした。毎日、自分で抗生物質をつけていたけど、3週間近く治らなかつたのと歩けなくなるほど痛み始めたため、とうとう病院へ行った。偶然にも、お医者さんは九州大学へ留学経験をもつ人だった。日本人にそのとき世話になったからと1回も診察料、薬代を受け取ってもらえなかつた。小さな病院だけどみんな親切で、僕は思わず泣きそうになってしまった。

ある日、生徒の家に招かれた。明らかにお金持ちで、お抱え運転手の車で家まで連れてつてくれた。お父さんは軍のお偉いさんらしく、軍服の写真を見せてくる。威圧感たっぷり。「なんでミャンマーは軍事政権なんですか？アウンサンスーチーさんを解放して、国民が求める民主化をしないんですか？」
と云ってみる度胸もなく、世間話をして帰った。

日本語を話すおじいちゃん

市場をうろろしてたら、75歳のミャンマー人おじいちゃんに日本語で声をかけられ、そのまま家に招かれた。第2次世界大戦中、日本軍がここを占領していた時、日本語の教育を受けたそう。彼は言う「日本軍は戦車を何台も所有していた英印軍の前に敗退したんだ。日本軍には武器も弾もなかつたよ」。日本はこんな遠い地でまで戦争をしていたのかとしみじみと実感。壁に飾ってあった日本語「たとえこの身はビルマの地に朽ち果てようとも永久に死なない大和魂」が心に響いた。

僕らの世代が想像することは難し

いけど、きつと最後まであきらめず
に戦ったんだろう。そして、戦争を
戦い抜いた人の犠牲の上に今の日本
がある。占領当時、日本軍がどのよ
うにこの地を統治していたのかわか
らない。このおじいちゃんは「日本
人とミャンマー人は仲が良かった」
と言う。おじいちゃんは戦後、生き
残った元日本人兵士たちと戦没者の
骨を探しだし、お墓を建てるのに協
力した。日本人の友だちがいるんだ
といい、実際に日本にも行ったこと
があると嬉しそうに話す。彼の話し
ぶりからは憎しみ、恨みのようなも
のは何も感じられず、僕は1人の日
本人として少しだけ救われる思いが
した。

最後にメッティーラを離れるとき、
生徒たち一人ひとりがお土産をく
れた。「また来る？」って何度も聞
かれた。小さな町で大きな出会いが
あったミャンマーを、僕は忘れない。

ボリビアがおもしろい

物価は中南米一安い。アジア並み。
「安いなあ」が口癖になる。屋台で
めし食ってたら、食費1日150円
前後で済んでしまう。道端で靴を磨

いてもらったら、たったの7円。し
きりに靴磨きの青年が、「日本だと
いくら？」と聞く。あまりの物価
の違いに正直に答えられなくて、ス
ペイン語が分からないフリをしてし



果てしない塩の湖で=ウエン(ボリビア)

別に貧しくて仕方ないといった悲壮
感はない。路上には服や食べ物があ
ふれ、活気に満ちている。物乞いも
いないこともないけど、全体として
暗い感じはない。そりゃ比べようも
ないほど生活水準は日本
より低いけど、彼らの暮
らしの中には彼らなりの
「生」がしっかりと根付い
ているように思う。

ちよつと治安が悪いの
がボリビアの難点。首都
ラパスの宿にいるとき、
「たつたいま首絞め強盗
にあっちゃいました」つ
て言う日本人が入って
きた。首絞め強盗とはベ
ルーやボリビアにいる強
盗団で、旅行者の首を絞
めて失神させ、その際に被
荷物奪う。何人もの被
害者にこれまで会ってき
た。街角の一室では、屈強な男たち
がいかにか素早く的確に首を絞め落と
すか日々訓練しているとか。まさか
ねー？

ペルーやボリビアの民族音楽
(フォルクローレ)ほど「ああ、南

米にいろんだなあ」って思わせてく
れるものはないんじゃないか。何か
懐かしくて仕方ないあの響き。ケ
ーニャやサンポーニャの楽器の音は、
耳で聴くというより体にしみわたる。
民族衣装を着た踊り手たちが演奏に
加わる。突然、踊り手に手をひかれ、
舞台上に引つ張られた。踊りなんて恥
ずかしくてできません、って思っ
てる僕が、「一緒に踊りたいっ！そ
の輪に入れてよ！」って思えるほど
にその空間は楽しさに満ちていた。

地元の人たちがよく集まるバーに
フォルクローレを聞きに行ったら、
「ようこそボリビアへ」って歓迎さ
れた。寄ってきたボリビア人たちに
シンガニというパイナップルのお酒
をおごってもらい、一緒に飲みま
く、踊りまくる。空手のまねをして
みせる酔っぱらったボリビア人のお
じいちゃんを見てると笑いがとまら
ない。地元の大学生の女の子は「私の
英語はだめなの」といいながらも、
フレンドリーに話しかけてくる。こ
の日、どれだけ笑い、踊ったことか。
フォルクローレの演奏はもちろん、
踊ることがこんなに楽しいと思えた
夜もない。



ラパスのお祭り。どう？キマっているでしょ＝（ポリビア）

違う店ではまたもや手を引っぱられ、舞台に上がり踊らされた。で、そのあといろんな国の旅行者がいるのに、日本人3人だけステージに呼ばれ、「上を向いて歩こう」を歌わされた。異国の地、大勢の前で日本の歌に酔う。言語が異なっても、音楽は国境を越えるというのは真実だと思います。

祭りだー祭りだ!!

年に一度の首都ラパスの大きな祭り「グランポデーロ」は最高に盛り上がった。個人的にはブラジルで見たりオのカーニバルより好き。規模や衣装の派手さではリオにかなわないけど、ただ見るといいうのではなく、一緒に踊りに参加できたのが良かった。

官がいつぱいいるけど何も注意されない。外国人ということで大目に見てもらえたのかもしれない。

おばちゃんがビール片手に酔っぱらう。学生たちが光ゲンジのような衣装と踊りで観客を魅了する。ミニスカートで踊る笑顔の若いねえちゃんたち。それを見てるおじいちゃん顔のしわをさらにしわくちゃんにさせながら拍手してる。いたるところで小さな子供たちが踊りをまねてステップを踏んでいる。ポリビア人たちはみなフレンドリー、よく話しかけられ、踊りに誘われ、ビールをもらい、笑顔に向けてくれた。大げさでなく、僕の体中の細胞が喜んでた。

インディヘナの伝統衣装を着たおばちゃんに手をひかれ、テレビ中継されているメイン会場も踊りながら

何百人という仮装をしたグループが朝早くから夜遅くまでひたすら踊りまくる。その体力に脱帽。観覧席でただじっと見てるのはじれったくて、行進してる踊りの列に加わった。警

ら通ってしまった。いいのか？何百人もの前で踊ったのなんて生まれて初めてだったけど、不思議といい気持ち。テレビか何かわからないけど、マイクをもたされインタビューマドでされてしまった。興奮してたんでちゃんとスペイン語話せてたどうか。

これまでいろんな国で祭りを見てきた。スペインでは有名な牛追いで祭りに参加し、牛から必死に走つて

逃げた。リオのカーニバルはさすがの大規模でその派手さは「紅白の小林幸子だらけ」って感じ。ネパールの祭りでは生き神「クマリ」とされている少女がかわいらしかった。パキスタン北部のお祭りはポロ（馬に乗ってやるホッケーみたいなもの）の競技が迫力満点だった。その他、ペルー、インド、グアテマラ：など



ラパスのお祭り。派手な衣装がまぶしい。あなたも踊る？＝ラパス（ポリビア）

祭りはいい、それに尽きる。その国の庶民のエネルギーを感じとれるし、人々がとにかく幸せそうだ。彼らは「人生は楽しむものなんだよ」って、音楽や踊りに込めている。そのメッセージをたびたび感じた日々に感謝!!

その土地の文化や伝統に触れ、人々と交流する。それがもつとも旅に出てよかったと思える瞬間。旅のスタイルなんてさまざまだけど、僕が最も感動したのは観光地でもなく、自然でもなく、そこにたくましく生きる「ひと」でした。